

5. 遭難信号（通信）

1903年頃無線電信が実用化され始めました。

イギリスが生んだ天才発明家マルコニーが無線電信を発明し、改良を重ねた結果、実用化の目途が付き、マルコニー無線電信会社が設立され、外に会社が無いため海岸局と船舶局は全てマルコニー無線電信会社から派遣された技術者が運用することになったのです。タイタニック号に乗り組んでいた通信士も船舶会社所属ではなく、マルコニー無線電信会社からの派遣だったのです。

この習慣はイギリスでは長く行われ、最近まででも通信士をマルコニーと呼んでおりましたが、近年では通信衛星の時代になりモールス信号による電信は消えて無くなりました。

ちなみに我が国における無線電信の最初は、1905年の日本海海戦において監視船 信濃丸の発信した「敵艦隊 203 点見ユ、対馬東水道二向カウモノノ如シ」が実用化の最初です。203というのは海図に細かな升目を書き込み、これに番号付し、この海図を各艦に配布してありますから番号が通報されると即座に位置関係が判明し、行動できるのです。

無線機はマルコニー製ではなく、逓信省の技術者が独自に開発した優れものでした。また戦争に活用したのも世界最初です。

さて無線電信による遭難信号の送受を解説します。この当時は中波だけが使用可能でしたから、500kHz（当時の表記は 500kc）が遭難信号の周波数でした。毎時 15 分から 3 分間と 45 分から 3 分間の 2 回必ず 500kHz の遭難信号を聴取する義務があります。これを沈黙時間といい無線ログに記載の義務がありました。また無線室の中央には GMT を表示する時計があり 15 分から 3 分間と 45 分から 3 分間は赤い帯が表示されておりました。

また遭難信号を発する場合は、この時間帯に発信すれば、各船舶局や海岸局が聴取していますから、直ぐに応答があるはずですが、信号は SOS（・・・ - - - ・・・）・・・が S の符号、- - - が O です。これは頭文字ではなく、音響として聴取した場合、一番明瞭に判読できるからです。

タイタニックの場合は、船長が遭難信号の発信を命じたのは、12 時 15 分とされていますから、衝突から 30 分以上経ってからのことです。ちなみに遭難信号の発信を命じることができるのは船長だけです。船長も衝突直後は不沈を信じていたのでしょう。乗船中の設計技師による 1 時間 30 分で沈没するという計算結果をみてから決心したようです。

映画では船長がCQDを打電するよう命じています（字幕はSOS）。この命令を受けた次席通信



士は一瞬困ったような表情をしました。これは当時CQDからSOSに符号が変わっており、若い通信士はSOSで教育を受けていますから、一瞬とまどったことでしょう。この映画の凄さは監督やライターが徹底的に調べ尽くして映画化していることに驚きました。もう一つは機関部のセット撮影の素晴らしさです。私は世代が違うのでスチームエンジンは見たことがありませんでしたが、映画を通じて大型船のボイラーとエンジンの細部がみられコンラッドが躍動するシーンには感動しました。若い二人の恋愛劇には何の興味もありませんでしたが、そのほかの船内を細部にわたって生き活きと撮っているシーンの連続には感動が一杯の素晴らしい出来栄の映画でした。もしできれば人間模様を除き、技術面だけをダイジェストしたDVDを売り出してくれないでしょうか。

さて本題に戻れば、通信長が以前の遭難信号であるCQDとSOSを両方を混ぜて発信しています。「CQD CQD SOS SOS CQD SOS DE(こちらは) MGY(呼出符号) TITANIC(船名) QTH(位置を示すQ符号) 4 1 ° - 4 6 N 5 0 ° - 1 4 W 救助要請 遭難状況」を繰り返し打電し、この遭難通信を5隻の船が受信しておりますが、一番近い船がカルパチア号で航路を変更して救助に向かい、約3時間30分後に現場に到着しています。

残念なのは、直ぐ近くにカリフォルニア号(6223トン)という貨物船が漂泊していたのですが、この遭難事故に全く気付かなかったことです。漂流していたのは冰山や流氷塊を認め、危険を感じて漂泊を決めたのですが、漂泊すると冰山や氷塊は潮で流されますが、船も同時に同じスピードで流されるので衝突の危険性は無くなります。この船には通信士が一人だけです。ですから夜半休んでしまい、重大な遭難信号は聴守してなかったのです。

船橋に二人の当直者がおり、大型客船の灯りを認めていますから距離は10海里以内と思われます。大海原は平原と同じでどこまでも見通せるような錯覚がありますが、地球は丸いので水平線の彼方は陰になってしまいます。ですから反航船の場合、水平線に妻楊枝のようなマストの先端が見えてきて、やがて浮き上がってくるように船体が現れます。この場合大型客船と認めているのは灯りの存在で、水平線上に船の全体像があったことを意味します。それだけははっきりと視認していることは航走30分位の距離でしょう。この当直者は遭難信号であるロケットの打ち上げているのを認め、この大型客船に対して発光信号で問い合わせをしていますが返事が無かったと後に証言しています。一方、タイタニック号も近くに漂泊している船がいることに気付き、盛んに発光信号を発しています。この発光信号はモールス信号と同じで、光で短、長の組み合わせで通信するのです。